令和7年度　大阪偕星学園高等学校　評価報告書

1　めざす学校像

人(生徒)は皆、星であり、生徒一人ひとりの個性を大切にし、かけがえのない存在としてその可能性を伸ばし、鍛えていく。生きる力を養う教育、個性を大切にする教育、共生教育。

- 常に教務の研鑽に努め、生徒一人ひとりの学力向上を図る。
- 生徒の個性と人権を尊重し、全人的な教育を実践する。
- 学園内の整備と美化に努め、より充実した教育環境を提供する。
- 進学・就職など、卒業後の生徒の進路を全力でバックアップする。
- 保護者の方々の意見を尊重し、学園運営に反映させる。

2　学校教育自己診断における結果と分析[　令和7年11月　実施分　]

実施対象は全学年生徒、保護者とした。回答は無記名、質問はアンケートと自由記述で実施した。保護者の回答率は92%、生徒の回答率は98%と高かった。保護者については、肯定的と捉えることができるAとBの和がすべての項目で70%以上に達しており、80%・90%以上の項目が全体の70%を超えている。また、生徒の回答についてもすべて70%以上に達している。今後も保護者、生徒の満足度を上げるよう努めなければならない。

回答率(回答数/在籍数)
生　徒　　1年:98%(443/453)　2年:97%(335/344)　3年:98%(259/263)　合計:98%(1037/1060)
保護者　　1年:94%(424/453)　2年:92%(315/344)　3年:90%(236/263)　合計:92%(975/1060)

※学校関係者評価委員会からの意見

【 令和7年7月22日(火) 】

・地域活動への参加などはされていますか。
→　地域との交流は、本校は非常に力を入れています。夏祭りなどにダンス部が参加したり、生野区の社会福祉協議会からの依頼で子ども勉強会に参加しています。林寺地区の小中学生を対象に夏休みの宿題を手伝うという取り組みです。この取り組みは今年で3年目になります。

・組織変更されたことに伴い、今回見せていただいている資料が例年とは違うと思うのですが、どういうことでしょうか。
→　別紙の表が今までの内容になります。アクションプランがあり、評価指標があるものです。これについては次回報告させていただきます。組織改変としては、それぞれのグループが責任を持って動けるように細分化されたというイメージを持っていただければ良いのかなと思います。

【意見】
・生徒を中心としたその指導体制への取り組みが明確化されたのかなというふうに、感じ取りました。特に生徒さんの状況を踏まえて、その生徒さんたちの興味関心をどのように作っていくかという「仕掛け」の部分、これが色んなアクションプランの中に入れられているのかなと感じました。どうしてもその「入口」の部分、そして「出口」の部分、いわゆるその受験生を増やすとか、あるいは卒業生の進路実績をどれだけ出すかというところにウェイトが高くなって、この「真ん中」の「中間」というところが、ややブラックの状態にはなるんですが、今回はその中間部分を前面に出されて、実際部署に分かれてこういうことを実施するんだと。それのチェック機構という形での評価指標というのを提示されたのかなと思って見ました。ただ、ちょっと気になりますのが、それぞれのアクションプランというのを実施されて、これがどのように何に繋がっているのかという、その「融合的」な動きのところが見えたら、より良いのかなと思いました。せっかくこれだけ色んな取り組みをされているので、「これとこれの結果が出たので、この結果、例えば出口の部分でこのような人材が育ちました」という、例えばそれはアンケート処理になるのか、その実績上の数字の人数になるのか分かりませんが、その辺の指標というのを持たれたら、より良くなるのかなという感想を持ちました。

・私は娘がこちらでお世話になっていて、近所、地元民になります。こちらに来て10年ほどになるんですが、生徒さんの行き帰りなど、色々見させていただいてきました。実際、自分の娘が今年で3年目になります。勉強以外の色々な取り組み、「おもろい」取り組みをされていると思っています。その影響かもしれませんが、これまで見ていた生徒さんとはまたちょっと違うなと感じています。

【 令和7年11月28日(金) 】

・組織を変えたことによって、従来と今回とを比較し、苦労された点やスムーズにいった点などを教えてもらいたい。
→　生徒部、総務部、教務部、進路部とあり、そこから枝分かれしたグループができました。誰が何をするのかは明確化されていったのですが、社会連携グループや生徒支援グループでもあったように、人数が足りないとなったとき、他グループの人が手伝い辛くなるという問題点がありました。最初の段階で、グループで人手が足りない時は、その部全体で取り組むというアナウンスをしておくべきであったという反省点があります。来年に向けてはこの辺りを改善していく必要があると感じています。

【意見】
・色々なお話を伺ってますと非常に上手く回転してるというか、これで入れ替えられて、上手く事が進んでいるという実績が出ている。特に私が素晴らしいなと思ったのは、生徒の自主性、主体性を生かす場面が非常に増えたなと感じました。これは非常に効果が高いんだろうなというふうな思いを持ちました。同時に課題探究にも力を入れて色々取り組まれてるんですけど、文面にも書かれていますが、やはり成績評価については非常に難しいところで、これだけ多岐にわたって取り組まれると、それをどういうふうな形でやっていかれるのかなというのは、今後、色々研究されることなのかなというように感じたりいたしました。

・色々な取り組みが、どんどん前に進んでるんだなということを感じております。最後に伺いました「ブラックスワン賞」を受賞したということ、これは非常に素晴らしいことだと思いました。

・体調不良と言いますか、行きづらくなり、学校を辞めざるをえない状況になってしまったお子さんがいます。先生方はお忙しい中、人数限られた中で対応されるのも難しいところがあると思うんです。先ほどあった外部委託というのも使って、サポートができたらもっといいんじゃないかなと思っています。

【 令和8年3月6日(金) 】

・転退学者は1年生が一番多いですか。

→　転退学者の6割から7割が1年生で、やはり1番多いです。先ほど言いました不登校の問題が一番多いですね。2年生に上がってっていうのも、実は、1学期特に多いんです。先ほど申し上げましたクラスに馴染めないとか、そういうのがあって、普通1年生でなんとか行けたら2年生では続くのかなっていうのがあるんですけど…。

【意見】
教育後援育友会で保護者の意見や、お困り事とかも色々といただいています。「先生には言いにくいし、スクールカウンセラーにも言えないので」と、私のところに話が来る場合が結構あります。ご相談というか、どうしたらいいんですかっていうので。私の娘はスポーツコースなので、その他のコースのことは分からないなりに、お答えとかもさせていただいたんです。スクールカウンセラーまではちょっと行くのが少し難しく、先生でもないけど、保護者でもない。そういう立場の方がいらっしゃったら、もうちょっと、スムーズというか…。学校寄りではないけど、親御さんの気持ち、生徒の気持ちも分かるような方がいらっしゃったら、もうちょっと違うのかと感じています。自分で決めるのが不安というか、そういう方が、皆さんの意見を聞くことができる、そういう窓口がありますよっていうのをしたら、退学者とかも減っていくんじゃないかなっていうのは、すごく私がこの3年間で感じたことです。

3　本年度の取組内容及び自己評価

	本年度の重点目標	具体的な取り組み内容	評価指標	取組内容の自己評価
取り組み①	学力の充実と進路希望の実現	①生徒達の理解度や進捗状況を丁寧に確認し、「わかりやすい授業」をする。また、定期考査は勿論であるが、模試の結果も教科としてしっかりと把握し、生徒たちの学力向上に努める。	①学校教育自己診断による、「授業はわかりやすい」の項目での肯定的回答75%以上	①担当者同士の連絡を密にしていくことや、定期考査の結果については把握できている。模試の数値については、担当者任せになっているのが現状である。学校教育自己診断による、「授業はわかりやすい」の項目での肯定的回答は75%だった。1年生が79%、2年生が73%、3年生が71%であった。昨年度に比べ、1年生の数値が7%上がっている。自分の考えをまとめたり、発表する機会を増やしたりしたことが、増加した要因であると考えられる。次年度からは、全体に展開していくことが、良い結果につながるのではないかと考える。
		②進学面では、実績数よりも、人数に対する合格率を重視して、質の高い進路指導を心掛ける。 就職面では、情報提供を確実に行うべく、情報提供システムの効率化と向上を図る。	②進路決定率95%以上。	②進路決定率は92.0%となり未達であった。もう少し早い段階から進路目標に向かって取り組んでいく必要がある。進学実績としては、関関同立7名、産近甲龍51名、摂神追桃46名であった。大学進学のうち、総合型選抜での合格率は24%であった。次年度以降、総合型選抜での合格率を増やしていきたい。そのための具体的な対策を実践していく必要がある。進学・就職に共通して即時的な情報提供を心掛けていきたい。
取り組み②	生徒指導の充実	①生徒会・ルールメイキングプロジェクトが起案した校則変更を支援する。	①学校教育自己診断による「先生は『生徒たちが学校をつくる・変える』ということを支援してくれている」の項目での肯定的回答60%以上	①学校教育自己診断による「先生は『生徒たちが学校をつくる・変える』ということを支援してくれている」の項目での肯定的回答86%であった。 ②学校教育自己診断による「自分たちで学校をつくる・変えることができる」の項目での肯定的回答83%であった。
		②「生徒たちの学校に対する改革の提案」と「生徒たちのエネルギーが拡大する取り組み」をリードする。	②学校教育自己診断による「自分たちで学校をつくる・変えることができる」の項目での肯定的回答75%以上	ルールメイキングのシステムの基盤を構築することができた。最終決定の場である校則審議会で提案した10個の案件のうち8個の案件を通すことができた。次年度については、実際にルール運用していく中で、全校生徒へのアンケート実施、定期的な代議員会を開催し、継続的に校則や学校について考える機会を設ける。また、校則改定だけではなく、生徒たちのマナーアップについても考える機会を増やしていきたい。自分たちで学校を作る意識を持つことで更なる生徒自治を目指したい。
取り組み③	学校組織運営の活性化	①各種奨学金募集に関する情報発信をおこない、生徒及び保護者の奨学金に関する認知度を高めるとともに、教職員の奨学金に関する知識を深める。	①学校教育自己診断による「学校は、奨学金制度についての情報を知らせてくれる」の項目での肯定的回答80%以上	①学校教育自己診断による「学校は、奨学金制度についての情報を知らせてくれる」の項目において、肯定的回答が82%であった。本校に案内のあったすべての案内をBLEND配信し、申し込み業務などについては問題なく処理されている。今年度より日本学生支援機構については、進路部が担当している。窓口となる進路部ほぼ全ての教員が知識を深めることも必要である。
		オープンスクールは知的好奇心を満たす要素も入れつつ「おもろい」を体感してもらう場に、入試説明会はより偕星のことを理解してもらいながら受験に向けての意欲を高める場とするプログラムにする。	②募集定員を確保する 特進コース(50名) 文理進学コース(50名) 進路探究コース(130名) スポーツコース(90名)	②入学者数は、特進コース(33名)、文理進学コース(118名)、進路探究コース(194名)、スポーツコース(99名)であった。文理進学コース、進路探究コースについては、募集定員に対し大幅増であった。しかし、特進コースについては未達となった。今年度、入試説明会とオープンスクールの内容を明確に区別した。OS参加者専願受験は、31.1%→35%。入試説明会は、53.0%→60%。特進コースの募集定員を充足しいていくため、これまでとは違った策を考え打ち出していくことが必要。

		③郵送での合格発表から完全WEB化した合格発表に変更できるよう検討していく。	③合格発表等のデジタル化推進（業務効率化）：郵送廃止、完全WEB化した合格発表を行う	③郵送廃止を廃位し、完全WEB化した合格発表を行うことができた。初年度ということもあり、事前の設定には時間をかけたが、実際の入試業務時においては、合格通知等の出力、住所確認、手引きの印刷、封入作業など、3人分×約1週間分程度の作業が削減できたと思われる。入学してからのデータ管理とも紐づけることができるように工夫することが必要。